

第266回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（19）

第9章 「日本ルネッサンス史論」への道 (1942-1966)

2 民俗学を超えて—柳田國男、橋浦泰雄との交流

福本が予防拘禁請求裁判の際に裁判所に提出した参考資料目録は獄中における研究内容を示している。目録の中から裁判所の提出書類などを除いた研究資料は次のとおりである（前掲『昭和思想統制史資料 共産主義・無政府主義者3』199-200頁、417-418頁）。

ノートブック（ツボ董ノ無化結實現象ニ就イテ）、植物葉圖、手記綴（近世學藝復興期ノ綜合比較研究）、手記綴追補（近世學藝復興追補）、手記綴追補（近世學藝復興追補第二完結）、近世學藝復興研究、近世學藝復興期年表追補第4、近世學藝復興期年表追補第5、語源、方言、略語ノ研究（補足一部）。

1936年の釧路在獄中に着想した日本ルネッサンス史論（近世學藝復興研究）の研究成果を数多く提出するのは、擬装転向を証明するためには当然である。植物（ツボ董）研究については福本と本田正次、牧野富太郎を仲介した人物は特定できている（第8章第4節参照）。「語源、方言、略語ノ研究」について福本と柳田國男を結びつけた人物は誰なのか。

左翼思想界に旋風を巻き起こした福本と民俗学（新国学）という新しい学問を立ち上げた柳田。イデオロギー的に全く異なる2人の接点を「発見」したのが、日本近現代史を専攻する鶴見太郎のデビュー作『柳田國男とその弟子たち—民俗学を学ぶマルクス主義者』（人文書院、1998年）である。本書は、転向後に柳田と関わりがあった大間知篤三（1900-1970、東大新人会幹事長、3.15事件で3年間下獄、1933年から柳田に師事）、石田英一郎（1903-1968、男爵、1925年の京都学連事件に連座して爵位を返上、3.15事件で6年間下獄、釈放後に柳田に師事）、中野重治らを取り上げた。その中でも福本と柳田の交流を詳細に描いた第5章「戦時下の郷土とマルクス主義者（II）—1942年夏 福本和夫の故郷再訪—」（135-166頁）は出色の出来である。

福本と柳田を結びつけたのは画家の橋浦泰雄（1888-1979、序章参照）であった。橋浦泰雄とはいったい何者なのか。少し長くなるが、橋浦のプロフィールを記してみよう。

橋浦は「肘掛け椅子民俗学者」である柳田國男を支えた大番頭のような存在であり柳田民俗学の最大の功労者一人である。

鶴見は第1章「戦時下に於ける民俗学研究の組織化—橋浦泰雄と「民間伝承の会」—」において柳田民俗学の拡大に尽力した陰の偉大なオーガナイザー橋浦の姿を描く。

さらに第2作『橋浦泰雄伝—柳田学の大いなる伴走者—』(晶文社、2000年)では、当時、鳥取県立公文書館への移送がなされつつあつた4000通を超える書簡類を含む「橋浦泰雄関連文書」を丹念に読み込み、波乱に富んだ人生を送った橋浦を現代に蘇らせた。

大岩村(現岩美町)岩本出身の橋浦泰雄が柳田と出会ったのは1925年である。クロポトキン『相互扶助論』(1902年、大杉栄訳、1917年)に親しんでいた橋浦は、北海道のスケッチ旅行の帰途立ち寄った下北半島尻屋村に原始共産制の遺制を見出し、堺利彦のすすめで調査の助言を求めるために柳田を訪れた。37歳の秋である。

(若き日の文学的思想的履歴は、日本海新聞での290回に及ぶ連載をまとめた自伝『五塵録』(創樹社、1982年)に詳しい。鳥取での文学活動、在京鳥取県人の活況と、最終章で描かれる有島武郎との交流は印象的である。橋浦は大杉栄の骨拾いに落合の火葬場に行き告別式にも訪れている。)

1921年のメーデーで検挙、45日間拘留された橋浦は、その後、日本プロレタリア芸術連盟(プロ芸)中央委員長、全日本無産者芸術連盟(ナップ)中央委員長を歴任、日本プロレタリア文化連盟(コップ)創立に参加し、非転向を貫いた。戦後は東京都生活協同組合連合会を創設して理事長となった。その一方で、各地で個展を開く画家でもあった。

柳田の還暦を記念して1935年7月末から8月初めにかけて開催された「日本民俗学講習会」の成功によって、民俗学の全国組織設立を望む声が高まり、同年8月に「民間伝承の会」(後の日本民俗学会)が発足する。橋浦は1938年に機関誌『民間伝承』の編集事務を引き継ぎ、編集、経理、発送等を一人で担う。戦局悪化の中、粉骨碎身の活躍によって会の組織化は加速度的に進んだ。

同学の士に依怙地なまでに厳格であった柳田のエリート気質とは対照的に、橋浦の朴訥とした飾り気のない人柄。橋浦なくしては地方のアマチュア研究者の組織化は不可能だったであろう。1950年にはその功績を称えられ、日本民俗学会年会で柳田、折口信夫(釧路空、1887-1953)とともに名誉会員に推挙された。なお、橋浦は度重なる民俗探訪を全国各地で行い、厖大な論考を発表している。代表作は『日本民俗学上より見たる家族制度の研究』(全2巻、日本法理研究所、1941年)、『熊野太地浦捕鯨史』(平凡社、1969年)である。

鶴見は『民俗学の熱き日々—柳田國男とその後継者たち』(中公新

書、2004年)刊行直後のインタビューで「それにしてもあの時代に、社会主義者で、いつ逮捕されてもおかしくない橋浦を守り続けた柳田の豪胆はみごとなもの。」と語っている(朝日新聞4月18日付「読書欄」の「著者に会いたい」)。鶴見は著作の中で、柳田が橋浦を守り通した理由を明確に示していない。

推測の域を出ないのだが、その理由は渋沢敬三(1896-1963)と宮本常一(1907-1981)の関係にヒントを求めるができるかもしれない。

日本資本主義の父である渋沢栄一(1840-1931)を祖父にもち、日本銀行総裁、大蔵大臣を歴任した敬三は、周防大島の農家出身で小学校教師の宮本を東京三田にある大邸宅の片隅に居候させて民俗学調査の旅を全面的に支援した。師弟であった二人の間には温かな感情が通っていた。帝国大学卒の農政官僚で貴族院書記官長、枢密顧問官まで登り詰めた柳田と高等小学校卒で生涯にわたって一介の「画工」であった橋浦の間にも、イデオロギーの違いを超えた人間的な緊密な絆が存在していたのではないだろうか。

鶴見の考証(前掲『柳田国男とその弟子たち』)によって福本と柳田の関係を見ていこう。

1941年12月、橋浦は東京青山で内科医を開業している中本誠一(第8章第4節参照)という面識のない人物から手紙を受け取った。福本とは一高、東京帝大の同窓生(鳥取中学校出身)である。中本は鳥取中学校の同級生で橋浦と親交がある野村愛生(1891-1974、旧大茅村、現鳥取市出身、小説家)、安藤英方(1892-?、北海道出身、明治書院取締役編集長)の名を挙げ、「同国人」のよしみで福本釈放の際には柳田「先生のご意見なりご閲覧なりを願ひ度存じ……候」(前掲144頁)と斡旋を依頼した。

4月24日に出獄した福本は4月下旬から5月上旬の間に柳田を訪問している。5月12日付で福本は仲介の労をとってくれた橋浦に「御蔭デ多年念願ノ先生ニ才目ニカルヲ得、感激致シマシタ」(前掲145頁)という趣旨の令状を送った。次回、柳田に会うときは、裁判所から返却された「近世學藝年表」とこのたび清書した「伯耆北条地方ノ訛言、方言、略語考」の「御一閲ヲ煩ハシ度イ」と書き添えている。

5月18日の午前、橋浦に会った福本はその足で帰郷する。6月16日付の初めての柳田宛書簡では、橋浦から木製雑器制作の職能集団である「木地山」「小椋」について話を聞いた、と書いている。6月21日付の第2信では、近世マニュファクチャの実例として倉吉町で千刃稻扱と刀工技術(たら製鉄)を調査したことを報告した。7月4日付で柳田は「御蒐集本日到着 拝見しました 中々熱心なる御観測やがて何かになり可申候」(前掲151頁)と激励の短

い返信を送る。

福本から橋浦宛には、7月1日付で方言採集の追補を柳田に送ったこと、木地山の調査を続いていることを伝えている。橋浦からの返信は8月6日付で、『民間伝承』の事務が多忙をきわめて返事が遅れたことを詫びつつ、船上山麓や中津村（現三朝町）などの調査を推奨している。それに対して福本は8月12日付で、橋浦と一緒に木地山の調査をしてみたい、と願望を語った。

福本は8月27日付の柳田宛書簡で「方言追補其の十」を発送したこと、8月29日に上京することを伝えた。それに先立って柳田は8月13日付で、福本が採集した「方言録」を添削して上京時に返却することを約束している。

故郷での約3ヶ月の休養、調査はこうして終わった。上京後も福本と柳田の交流は続く。福本が東京成城の柳田邸を訪問できないときは息子の邦雄が代わりに訪れた。柳田が1944年元旦から翌年にかけて戦時下の日常を綴った『炭焼日記』によると、「るす中、福本邦雄君、和夫君の息子、本を持ってくる」（3月27日）、邦雄が「父の為『御蔭参り』の資料を借りて行」き（3月30日）、返却して「又、『服装語彙』をかりて行く」（4月16日）とある（前掲158頁）。邦雄が来宅したときのみ記録していることから和夫本人の訪問は相当の頻度であっただろう。

それからおよそ70年後の2012年1月、福本の方言調査が刊行された。『福本和夫稿 伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考（柳田國男の読後メモ付き）』（全196頁）である。編集発行元は鳥取県北栄町教育委員会。通常であればイデオロギーには敏感な行政がマルクス主義者の論稿を出版することはあり得ない。当時の北栄町長、北栄町教育委員会、そして刊行予算を計上した北栄町議会など関係者の英断である。

『訛言・方言・略語考』の中から柳田がコメントを付した興味深い項目を挙げてみよう。単語の次に福本と柳田のメモが続く（福本によるコメントがない場合もある。福本、柳田が記した部分は読み易さを考慮して常用漢字、平仮名交じりに直した）。

「火事ガイル」—柳田「「火事がいる」は珍し、中播では「火事がいく・行く」」（前掲4頁）

「シャカン」「シェンセイ」—福本「左官、先生」、柳田「SはもとShならんといふ誰かの論文あり、九州ではここにこの例著し、ありまっしぇん、福岡熊本など」（前掲6頁）

「タヨ（サン）」—福本「神主（さん）」、柳田「山陽の方は太夫、「たいふ」とはつきりいふ、全國の両端に尤も弘くつかはる語「太夫」、古語には「まうなぎみ」と訓す」（前掲6頁）

「イナンバノ扱落シ」—福本(略)、柳田「千刃は「千把」かとおもふ、せんばこき」(前掲67頁、追補其の四)

「シンモ」—福本「新喪(按づるに、シニモの訛り)」、柳田「新亡なり 古語」(前掲85頁、追補其の五)

「ギャーヶ」—福本「風邪」、柳田「咳氣」(前掲95頁、追補其の六)

「ミタテ」—福本「葬式」、柳田「見立て、送別ならん」(前掲97頁、追補其の六)

「トージクソ」—福本「とりとめのないこと、とめつぢのあはぬこと」、柳田「刀自詫の刀自」(前掲145頁、追補其の十)

「ジゴシャ」—福本「自修自得」、柳田「地巧者ならん」(前掲146頁、追補其の十)

福本「唐辛子を称して、一般に、胡椒といつて(以下略)」、柳田「蕃椒を「こしょう」とは九州一円、中部では東美濃から信州を抜け越後の海に達する一帯あり」(前掲9頁)

福本「石油のことを石炭アブラといふ(以下略)」、柳田「石炭アブラも中国以西に弘し沖縄などは単に「セキタン」といひ、或地では誤って「セキタンサン」とさへいふ」(前掲10頁)

福本「お尻のことをケツと云ふは、穴の音読から来たもの乎。」、柳田「「ケツ」の発生に対する私見 ゲツツ、ゲツ、ゲスも一つで多分ツメ(終り)に賤称の「ゲ」をそへたもの。穴の漢字ではなからう」(前掲10頁)

悪病除ケノ呪文「ショニンショーライ子孫ナリ、コタン長者ノ子デハナシ、アブラウンケンソウカ」—福本「此の呪文を病家に入る時、三度唱え親指を握って入れば、悪病をまぬがれると云ふ。これは老婆から聞いたもので、冒頭の言葉がよくわからないが、暫く、わからないままに、記した次第である。」、柳田「蘇民将来巨且将来のこと、釈日本紀所引備後風土記に」(前掲107頁、追補其の六)

福本が「ネンブー、ネンブチャー、ネンブチャゴ(又はネブチャゴ)」について柳田説に納得がいかず自説に固執する箇所もある。

目高をネンブーと云ふことは、さきに「目高雑考」(前掲書附録—岩田注)の章に記したが、ネンブーの外ネンブチャーとも云ひネンブチャゴとも云ふ。……目高の生態的特徴とを考へ併せて、ネンブーと睨み坊の謂ひであり、目高の特色を最も生き生きと表現したいい名称だと解して、柳田先生のご意見を伺った所、先生は広汎なる比較研究にもとづいて、目高の方言には、念佛

魚といつてゐる方が方々にあり、それは念佛者の団体行列のやうに、群集して井るからと見えての名称である（中略）。目高の特色は群集して井ることより、より多く、目にあり、目は單に、高いと見るより、睨んで井るやうだと見る方が、一段すぐれた観察眼であることは何人も異論なかる可く、念佛魚なるは、目高の名称それ自体としては、最も愚劣な部類に属すると思ふが、それは兎に角、語源論としては、私の考へた睨み坊は、どうも歴史的根拠が乏しい点で、疑問だとわかった。比較研究を欠いて立論だから致方ない。（附録「伯耆北條地方の動物方言」、前掲書所収、176—177頁）

以上が『訛言・方言・略語考』からの抜粋である。福本のこの習作は倉吉地方の実地調査の一環として位置づけられる。民衆の生活を「低い目線」で観察する民俗学は福本イズムの晦渋な文体を大きく変えるきっかけになったのではないか。（なお、福本の方言調査に関する論稿に桑本裕二「『福本和夫稿 伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』（1942）の福本和夫の研究歴全体への位置づけと言語学・方言等からの再検討」公立鳥取環境大学研究紀要（第16巻）、2020年、45—64頁、がある。）

理論的考察にふさわしい文体は人々の心の機微（柳田民俗学の「心意現象」）を描写する文体とは自ずから異なる。哲学や思想の文章の運び方と小説のそれが同じでよいはずはない。マルクス主義理論家としての福本の文章が直線的であるとすれば、柳田はくねくねと曲がりあちこちに寄り道をするような文章を書く。釈放後に発表する福本の論考からは過度な抽象表現が姿を消した。具体的事象・資料に基づく実証的な議論に転じたといえる。下獄前と釈放後の文体を比べると、同じ人物のものとは到底思えないほどである。日本ルネッサンス史論の完成に向けた旺盛な執筆活動は、抽象を抑制して具体に迫る文体で行われていく。

福本の晩年の弟子ともいえる石見尚によれば、柳田が福本に次のようなアドバイスを与えたという。

全国各地に民俗に关心があつて調べている同好グループが沢山あるんだ。僕の民俗学はその基礎の上に成り立っているんだよ。君にはその組織がないし、出来ないだろう。民俗学はよした方が良い。（『福本和夫著作集 第3巻 初期文化史研究』こぶし書房、2008年、「第3巻月報」所収、「新資料の発掘『福本和夫著作集』第3巻の紙背を読む」13—14頁）

福本はいつ柳田から言われたのか覚えていない。1942年8月末に上京して柳田邸を訪問し、柳田による朱書きの入った『訛言・方言・略語考』を返却されたときの可能性はある。柳田は福本が日本近世の研究に着手していることを知っている。収集語彙の中には農業、漁業、手工業などの技術に関するものも多数あつた。「民俗学に深入りすると、所期の目的に到達できなくなる」と好意から述べたのであろう。柳田との出会いは大きな意味をもつた。

敗戦までに刊行された主な著作は千刃稻扱、抜け参り、漂流船、古兵法に関する研究書である。

1943年に入るとすぐに福本は帰郷する。前年の実地調査を補うためであった。その成果は「序文」の日付が1943年5月4日となっている『技術史話雑稿』（北光書房、1943年11月、前掲『福本和夫著作集 第3巻』99-189頁、所収）であり、弟の多賀義憲に著者名を借りた。

伯州倉吉の鍛冶町は、元禄6（1993）年から大正の11、12（1922、23）年前後まで230年間の久しきにわたり千刃稻扱の生産を一手に引受けた全国に供給販売した所なるにも拘らず、余りに僻陬の地なる為めであろうが、一には、従来の技術史家が日本の自覚に乏しく、真に日本の器具や技術には却って注意しない傾向にあつたため、こんにちは其の名さえ知る人稀のようである。

幼稚きわまる扱管に代わって、これが発明され始めた当時、扱管の能率に比して、千刃稻扱のそれが、如何に面目一新の驚嘆に値する発明であったかは、後家倒しとか、後家泣かせなどの異名が千刃稻扱につけられた一事を以てしても容易にこれを想察することが出来よう。

（前掲105頁）

『技術史話雑稿』第1部「稻扱史話」には安藤安貞『農業全書』の「扱箸圖」（前掲111頁）、北斎「稻扱の図」（前掲133頁）など実際の労働現場を描く図版が多数掲載されている。福本は稻扱の発展を「扱箸（竹製）→扱管（竹製、鉄製の）→千刃稻扱（竹製の唐箸、鉄製の鉄扱、後者は1693年から1922、23年前後まで倉吉鍛冶町で製造）→回転式稻扱機（足踏式、1918、19年前後より）→回転式脱穀機（動力式、1922、23年前後より）」と図式化する。千刃鍛冶屋や製作工程の図解、行商人による販路（北海道から九州、朝鮮まで）、原材料となる砂鉄採集などにも目配りがなされている。第2部「刀工水心子復興のために、其他」は中国山地の木地師

たちからの聞き取り（5頁分）のほかには江戸期の伝説の刀工を取り上げる。第3部は「古代支那科学・技術史話」である。

1943年8月11日の日付の「序文」をもつ『抜け参りの研究』（倉吉中学校の同級生で東京の善隣高等商業学校（善隣高商）教授であった吉岡永美の名義、北光書房、1943年11月、前掲17-98頁、所収）によると、江戸時代の伊勢神宮への抜け参り（御蔭参り）のピークは慶安3（1650年）、宝永2（1705）年、明和8（1771）年、文政13（1830）年の4回あり、おおよそ60年周期であった。本書は『技術史話雑稿』と同様に「抜け参り地方別略図」（前掲21頁）、「犬や牛の御蔭参り」（前掲29頁）、「おかげ踊りの図」（前掲31頁）など多くの図版が収録されている。あわせて抜け参りの歌、旅を導く御師、諸家（本居宣長、太田南畠、滝沢馬琴、杉田玄白ら）の所見、等々、抜け参りの諸相をコンパクトにまとめた労作である。筆者の手許にある藤谷俊雄『「おかげまいり」と「ええじやないか」』（岩波新書、1968年）と比較しても何ら遜色はない。時節柄、抜け参りを「徳川幕府封建制の世に於て、我が国体に対する庶民の自然発生的な自覺的、復古的運動」であり「世界の歴史に嘗てその類例を見ぬ国民的運動」（「序文」、前掲35頁）と評している。それに対して、世界中で同時多発的に発生した若者たちの反乱の最中に書かれた『「おかげまいり」と「ええじやないか」』が御蔭参りを「解放運動」と見做し、「封建支配のもとで、被圧迫状態におかれていた民衆の、自発的な大衆行動であった「おかげまいり」が、容易に封建支配に対する階級闘争に転化しうる、エネルギーを内包していたことは明らかである』（前掲『「おかげまいり」と「ええじやないか」』151頁）と解釈したことは実に興味深い。これではどちらが福本の著作かわからないではないか。

「序文」の日付が1943年11月30日となっている『漂流船物語の研究』（吉岡永美名義、北光書房、1944年5月、前掲『福本和夫著作集 第3巻』191-389頁、所収）の本文は「日本の歴史は……世界に類の無い程多数の漂流船物語を産出した。」（前掲213頁）という文章で始まる。さまざまな船の図版、漂流海域の地図、海流図などを多数掲載する本書の特色は第1部「研究総論篇」、第2部「研究各論篇」に分かれていることである。第1部では漂流船の規模、漂流の方向・季節と風向・海流などを分析したうえで、漂流船物語に関する諸家（西川如見、司馬江漢ら）の所見、漂流民をめぐる仙台藩とロシアの交渉、漂流船物語の分類を論じている。

福本の卓見は漂流船物語を甲型、乙型（甲乙折衷型）に分けたことがある。甲型は「より本質的な漂流船物語、漂流それ自体」（前掲295頁）、乙型は「漂着して後ち、送還される迄の異国異聞の珍奇」（294頁）を描いた物語である。第2部は甲型に絞って3篇

を紹介する。そのうちで「尾張船頭重吉の太平洋漂流物語」は圧巻である。藩米を降ろしての帰り、1813年10月に江戸を出発した尾張藩御廻米船・督乗丸は太平洋を漂流して、南米沖でイギリス船に救われる。メキシコ、アメリカ、カムチャッカを経て、日本領択捉島の沖でロシア船から小舟に乗り移って上陸。蝦夷から江戸へ、そして名古屋帰着が1817年5月であった。乗組員14人中、故郷に生還できたのは船頭の重吉と水夫の音吉だけである。重吉は尾張藩から7石2人扶持を賜り（水夫は5石か6石で2人扶持）、下賜金もあったという。破格の待遇である。福本は1943年11月に重吉が建立した「督乗丸漂流死没者供養碑」（名古屋市熱田区の成福寺）に詣でている。

「序文」に1943年7月の日付が記された『東洋古兵法の精神』（多賀義憲名義、北光書房、1943年11月、前掲391-477頁、所収）は孫子の兵法を新井白石、山鹿素行、荻生徂徠、東郷平八郎らがいかに論じたかを中心に論じ、その他、孫子にまつわるエッセイを収録している。

ところで、柳田は福本に尾佐竹猛（1880-1946、大審院判事、明治維新史、明治文化史の研究者）を紹介する。尾佐竹は三田村鷲魚（1870-1952、江戸文化・風俗研究者、江戸学の祖と呼ばれる）、竹越與三郎（1865-1950、衆議院・貴族院議員、枢密顧問官、明治・大正・昭和前期の言論界で活躍）、徳富蘇峰（1863-1957、ジャーナリスト、歴史家、思想家）らと並ぶ「博覧強記の好学の士」である。

福本が尾佐竹に教えを乞うた様子は、日本ルネッサンス史論の第1弾といえる『日本近世の文化革命—日本近世学芸復興期論序説』（文化生活研究社、1949年、前掲『福本和夫著作集 第8巻』33-140頁、所収）に収録された「尾佐竹博士にささげるの言葉」（原題「尾佐竹博士を悼みて」1946年10月12日、同月22日付の『第一新聞』掲載）で垣間見ることができる。

福本は釧路在獄中に尾佐竹の『維新前後に於ける立憲思想』（上下巻、文化生活研究会、1925年、1853年のペリー来航から1885年の内閣制度樹立までを扱う）を読み、画期的な不朽の一大名著だと思った。さらに吉野作造の序文がすこぶる名文で感心した。

1942年11月下旬、柳田の紹介で四谷三光町の尾佐竹宅に伺う。「日本近世学芸復興期の綜合比較研究」第1巻総論編の第2次草稿を持参したところ、尾佐竹は福本の出獄と研究を心から喜ぶとともに草稿に目を通すことを快諾した。毎土曜日が面会日であつた。

「自分が維新史を研究してみて、維新史をほんとうに究めつくすには、どうしても遡って、徳川時代を新たに研究し直す外ないとつくづく痛感するに至っていた次第だ」とおっしゃって、私の日本近世学芸復興期の綜合比較研究を、つぶさに検討し、確認して下すった。私は予期以上の御理解に甘えて、第1巻総論編の巻頭に、何か史論に関して平生御考えになっている1、2行の短い警句を題していただけないでしょうか、と御願いしたところ、……、翌1943年の新春に書いて送って下すった所をみると、驚くべし、実に400字詰原稿用紙10枚に及ぶ長文の序文で、「此書は単に総論だけにとどまるのではあるが、それだけでも画時代的大著である。中国と比較し、西洋と比較し、世界的立体感を築き成した壯觀は、眞に一大著述である。続いて、其の各論の出でて、学界を驚倒し、思想界を圧倒せられんことを切望の至に堪えないものである。」という如き誠に身にあまる過褒激賞の辞をいただいたのは、眞に恐縮の至であった……。 (前掲『福本和夫著作集 第8巻』43-44頁)

尾佐竹が寄せた序文の一部は『霧笛』(352-353頁)に掲載されているが、全文は著作集には収録されていない。福本は尾佐竹の激励によって推敲に推敲を重ねて、尾佐竹に初めて会った3年後の1946年に『日本近世の文化革命』を発表する。本書は日本近世学芸復興期(日本ルネッサンス)の時期の確定、西洋・中国との比較、鉱山業・鉱山学、貨幣経済の発達、農民闘争、東西絵画の比較、中国古代・明代文化、国学、医学、法学、漂流船と造船・航海術など多岐にわたって論じている。むろん日本ルネッサンス史論の完成体とはほど遠く習作の域を脱していない。

敗戦前から福本は日本ルネッサンス史論の各論である日本捕鯨技術史、葛飾北斎の研究を進めていた。